

八銀杏

第65号改訂版
令和8(2026)年
2月13日
藤嶺学園藤沢
中学校・高等学校
新聞部
(高校)
川村一樹 高橋航之介
古谷貴一 堀竹涼平
秋山 尊 塩見那摩斗
中国智晶 大庭新一朗
中原圭太 代島蒼一朗
(中学校)
村瀬弘旭 石崎航成
題字 東山 右敬 先生

第54回弁論大会決勝7名が熱弁

11月11日、本校講堂にて、高校生7名による弁論大会決勝が行われた。本大会は高校生徒会の行事で、夏休みに生徒が弁論原稿を執筆し、9月に各教科教諭による書類審査の一次審査、10月に弁論による二次審査(予選)を経て上位7名が決勝に進出した。決勝では、各科教諭に加えて高校生徒会が参観・審査し、精鋭7名による熱い弁論が繰り広げられた。



弁論大会 決勝

藤嶺学園生徒会

④最優秀賞の原田君 ⑤優秀賞の堺君 ⑥優秀賞の武田君

と主張し、「『知らなかった』では済まされない時代。一人一人が小さなことで、も知り、偏見のない社会を願っている」と語った。



出場者を讃える教頭先生

3人目は、堺新太君(2A)「START」の深い情報によって、戦争に深刻な食品ロス問題を取り上げ、まだ食べられるにもかかわらず廃棄されている実態を説明。食べ合わせを工夫することで無駄を減らし、栄養も効率よく摂取できると提案した。

4人目は、武田瑛充君「人それぞれが異文化で味を持たないと指摘し、あると述べた。さらに、高フレットを見た際、「型にめめられず気楽そう、部活を超えて人とつながれる」と感じた」と語った。

5人目は、原田詩大君(1F)「異文化コミュニケーションのすゝめ」。8月のオーストラリア語学研修での体験をもとに弁論した。食堂やベンチで明るく話す生徒がいる一方、シャイで口を開かない人もおり、「オーストラリア人は全員明るい」という思い込みは一部にすぎないと気づいた

6人目は、矢吹聖侍君(2E)「軌跡が奇跡になる瞬間」。イングラウンドのプロサッカー選手、ジェイミー・ヴァーデー(Jamie Vardy)からドラフト1位指名を受けた事例を挙げ「あきらめずに続けることで奇跡は起こる」と語った。

7人目は、大庭航也君(2F)「部活動は誰のためにやるのか」。硬式野球部に所属する自身の経験をもとに、部活動の在り方を考察。「勝つために犠牲を払わなければならない」「遊んでいる場合ではない」といった価値観がある一方で、「部活動は生徒や保護者にとって意味があり、そこでの出会いが自分の強みになる」と語った。



白熱した弁論 舞台中央に視線が集まる

審査の結果、優秀賞には武田瑛充君「生命とは」と堺新太君「START LINE」が選ばれ、最優秀賞には原田詩大君「異文化コミュニケーションのすゝめ」が輝いた。

表彰式では、香西教頭が優秀賞者2名に賞状と盾、最優秀賞者に賞状とトロフィーを授与した。香西教頭は「弁論大会は毎年、生徒の最新の意見が表現されており素晴らしいです。今回は特に今日的なテーマを深く考察した弁論だったと感じます。今の時代、AIで文章を作ることでもできますが、発表してくれた皆さんの弁論は、AIでは書けない自身の経験と考えが誠実に表現されていました。感動しました」と称賛と今後への激励の言葉を送り、大会は幕を閉じた。

本番前、弁士に心境を伺うと「少し緊張している」「頑張ります」「自信があります」といった声が聞かれた。

1人目は、柘植一真君(1B)「起立性調整障害について」。中学1年生のときに発症し、不登校となった自身の体験を語った。学年・担任の先生の助言を受け、放課後から少しずつ登校する「スモールステップ」を重ね、5・6限目へと登校時間を早めながら回復していった経緯を紹介。「それがなければ学校に行けなかった」と述べ、支えてくれた友人や先生への感謝をほし、「と呼びかけた。

2人目は、苅部福太君(2E)「性的マイノリティへの偏見」。性について正しく知ることの重要性を強調し、日本の性教育の不十分さを、AI依存が進む現代社会を考察した。AIは動作情報を受け、偏見を抱くことによって感情を模倣でき、若者が増えている現状を指摘。大人自身やSNS、広告知などによるステレオタイプな発言をやめることで、肯定的な社会はつくられる

3人目は、原田詩大君(1F)「異文化コミュニケーションのすゝめ」。8月のオーストラリア語学研修での体験をもとに弁論した。食堂やベンチで明るく話す生徒がいる一方、シャイで口を開かない人もおり、「オーストラリア人は全員明るい」という思い込みは一部にすぎないと気づいた

4人目は、武田瑛充君「人それぞれが異文化で味を持たないと指摘し、あると述べた。さらに、高フレットを見た際、「型にめめられず気楽そう、部活を超えて人とつながれる」と感じた」と語った。

5人目は、原田詩大君(1F)「異文化コミュニケーションのすゝめ」。8月のオーストラリア語学研修での体験をもとに弁論した。食堂やベンチで明るく話す生徒がいる一方、シャイで口を開かない人もおり、「オーストラリア人は全員明るい」という思い込みは一部にすぎないと気づいた

6人目は、矢吹聖侍君(2E)「軌跡が奇跡になる瞬間」。イングラウンドのプロサッカー選手、ジェイミー・ヴァーデー(Jamie Vardy)からドラフト1位指名を受けた事例を挙げ「あきらめずに続けることで奇跡は起こる」と語った。

7人目は、大庭航也君(2F)「部活動は誰のためにやるのか」。硬式野球部に所属する自身の経験をもとに、部活動の在り方を考察。「勝つために犠牲を払わなければならない」「遊んでいる場合ではない」といった価値観がある一方で、「部活動は生徒や保護者にとって意味があり、そこでの出会いが自分の強みになる」と語った。

審査の結果、優秀賞には武田瑛充君「生命とは」と堺新太君「START LINE」が選ばれ、最優秀賞には原田詩大君「異文化コミュニケーションのすゝめ」が輝いた。

表彰式では、香西教頭が優秀賞者2名に賞状と盾、最優秀賞者に賞状とトロフィーを授与した。香西教頭は「弁論大会は毎年、生徒の最新の意見が表現されており素晴らしいです。今回は特に今日的なテーマを深く考察した弁論だったと感じます。今の時代、AIで文章を作ることでもできますが、発表してくれた皆さんの弁論は、AIでは書けない自身の経験と考えが誠実に表現されていました。感動しました」と称賛と今後への激励の言葉を送り、大会は幕を閉じた。

高2 赤嶺喜君 TBS番組「THE TIME」全国！中高生ニュースに出演

11月30日、本校体育館に「全国！中高生撮影先を決定している」との、TBSの情報番組「THE TIME」(毎週月から金 午前放送)の収録が行われた。同日「THE TIME」(毎週月から金 午前放送)の収録が行われた。同日「THE TIME」(毎週月から金 午前放送)の収録が行われた。同日「THE TIME」(毎週月から金 午前放送)の収録が行われた。



全国2連覇の実力に驚愕

生徒3名がレポート・撮影 当日は体育館に「神奈川川会」のメンバーに加え、香西教頭先生が見守る中、佐藤航先生、菊地先生、小谷野先生、後藤先生、板垣先生、本校野球部OBなど、運動部系の8名が集まり、和やかな雰囲気の中で撮影がスタートした。

全国大会2連覇 綱引きチームに密着

今回の収録では、2年A組の赤嶺喜君が所属する綱引きチームが特集された。赤嶺君のチーム「神奈川川会」は、18歳以下の全日本綱引き大会で2連覇という快挙を達成しており、その活躍が番組スタッフの目に留まった。取材に訪れた堀ダイレクターによると、このコーナー最大の特徴は、スタッフが用意したカメラやスマートフォンを使い、高校生自身が撮影を行い、カメラマンやリポーターも高校生が務めるという独自の制作スタイルにあるという。番組では全国の学校へ日々取材を行い、リサーチ会社から寄せられた情報をもとに



レポートも撮影も生徒が担当

「本校一のエンターテイナー」と名乗り、町田君は「藤嶺の貴公子」と自己紹介し、笑いを誘った。続く体育館へ走るシーンでは2テイクで終了し、撮影は順調に進んだ。

赤嶺君紹介も スムーズに収録

続いて教室での撮影が行われた。3名は冒頭で「同級生の赤嶺君は、綱引き日本最強の指令塔です」と紹介し、堀ダイレクターは「40分かかってもあるが皆上手だったので早く撮影ができた」と称賛した。

綱引きとの 出会い

体育館でのインタビューでは、綱引きを始めたきっかけについて質問が投げかけられた。赤嶺君は、小学生の頃に母親が綱引き大会の委員を務めており、出場を頼まれたことがきっかけだったと語った。大会で大人たちに褒められた経験から、綱引きが楽しくなり、本格的に取り組むようになったという。



チーム「神奈川川会」にインタビュー

また妹もチームの主力として活躍しており、赤嶺君自身は小学2年生の頃からアンカーを務め、現在も8名

のチームを引っ張る存在である。アンカーは高度な技術を要するポジションであり、その適性を見込まれて任されているとのことだ。

先生方・卒業生との対戦

撮影では「神奈川川会」の学生8名と、先生方・野球部OBによる大人合同チーム8名との対戦も行われた。結果は「神奈川川会」が大人合同チームを圧倒し、見事勝利。大人たちが引きずられる迫力あるシーンが収録された。

その後「神奈川川会」5名対「大人合同チーム」8名では大人合同チームが勝利したが、6名に増員すると「神奈川川会」が勝利するなど、綱引き競技ならではの白熱した展開が続いた。力が拮抗する中で勝敗が決する綱引きの魅力が、強く伝わってきた。

今回の収録は約3時間に行われ、赤嶺君のインタビューや撮影は丁寧に進められた。新聞部として取材を行った私は、長時間の取材によって得られる情報の多さや、粘り強く話を聞く姿勢の大切さを学ぶ貴重な機会となった。

12月10日朝、全国放送を通じて、本校生徒の活躍が広く届けられた。【秋山】

黒岩知事との「対話の広場」

平塚開催、住民の意見から地域の未来を考える場
10月27日、「黒岩知事との対話の広場」が17時から19時まで、平塚文化芸術ホールで行われました。テーマは「共に創る地域の未来」住民参加から生まれる活力と絆」です。

「黒岩知事との対話の広場」は、県内各地の施設を会場に、県政の重要施策や地域課題について、神奈川県民と黒岩祐治知事が直接意見を交わす場となっています。開催のたびに参加者募集が行われ、神奈川県公式ウェブサイトに公式Xアカウントなどで案内されるほか、参加申込書をFAXや葉書で提出する形式も用意されています。今回、私たちは学校を通じて、生徒会・新聞部として意見を書き、応募しました。

当日は、まず全国こども食堂支援センター「むすびえ」の三島理事理事長（写真前列⑤）、続いて平塚まちなか活性化隊の水嶋祥貴氏（写真前列⑥）による事例発表が行われ、その後、参加者と黒岩知事との意見交換へと進む構成でした。会場には県内の高校生や大学生、地域住民が多数集まり、活気ある雰囲気にもなっていました。

三島氏は、子ども食堂の取り組みについて「子どもたちだけでなく、デイサービスに通う高齢の方にも来てもらい、おはぎ作りなどを通して、子どもと高齢の方が交流できる機会を作りました」と紹介しました。

水嶋氏は、幼稚園や小学校とは異なる「子どもを預けられる憩いの場」を地域に設けた取り組みについて触れ、「コロナ禍



閉会后、知事との記念撮影

の中で親御さんの声を聞き、少しでも力になればいいと思います」と語っていました。

住民との意見交換の時間では、多くの参加者が手を挙げ、発言の機会を得るのが難しいほどでした（前半は高校生・大学生の発言時間であったため、後半は意見を述べるのが難しい状況でした）。参加者の中には、8月の神奈川県ハイスクール議会で顔を合わせたことのある高校生の姿も見られました。

住民からは「障害のある方一人暮らしは心配。地域の人々とともに、行政の力で支えてほしい」「住民が何かを立ち上げる際に行政はどのような保障をしてくれるのか」など、幅広い視点から意見が寄せられました。

黒岩知事は最後に「行政だけでなく、皆さんと行政が協力して地域活動を立ち上げていくことが重要です。行政は、皆さんが実施したいことの準備段階で協力できる面があります」と語り、会場を締めくくりました。

終了後には黒岩知事との記念撮影が行われ、参加者は交流の余韻を残しながら会場を後にしました。

【秋山・中園】生徒会役員感想 山口蒼太君

昨年度も参加し、今年も地域社会への参加がテーマで高校生向けでした。会場意見の中で、障害者の方についての内容が多く話されていました。その中で障害者の方の居場所がないという話を聞いて、藤原藤沢は障害者も多く受け入れるようなことをしていないので、考えさせられました。

堀内 爽矢君 私は「対話の広場」に参加して様々な視点を聞くことができて、また、今回は学生の私たちに

桔梗屋文化祭2025に向け生物部が旧桔梗屋を見学

11月22日、生物部は12月14日、15日に藤沢市主催で開催される「桔梗屋文化祭2025」(写真⑤)に向け、展示場所の下見および施設見学を行った。生物部は、日光が当たって暖かい場所を生物展示の環境として希望しており、店舗玄関・店蔵前・文庫蔵等が候補となった。

当日は、藤沢市景観課湯本氏の案内のもと、国登録有形文化財として知られる旧桔梗屋の主屋、店蔵、文庫蔵、庭園を巡り、建築物の特徴や保存の取り組みについて、詳細な説明を受けた。

店蔵(みせぐら)
明治44年(1911年)竣工。街道に南面して建ち、梁間3間(約4.45m)、桁行4間2尺(約8.48m)の上屋を持つ。前面には奥行半間(約0.9m)の下屋庇が付き黒漆塗りの外壁や2階の出格子、蛇腹、観音開きの窓など、江戸型店蔵の特徴を色濃く残す。通常は非公開の2階も見学させていただき、壁の漆喰や防火の工夫、強風や台風を想定した造りなど、当時の技術が随所に見られる。この空間は倉庫として使用されていたほか、約50年前には文芸作家が居住していた時期もあった。

2階も見学させて頂き、筆筒の後ろにはヤモリの卵の跡が残る。また壁面には大飼毅が記したとされる筆書きも残されている。主屋は店蔵と設計のラインが揃った。

歴史と文化が息づく桔梗屋の建物群を巡った今回の見学は、生物部にとって展示準備にとどまらず、地域の歴史と伝統に触れる貴重な学びの機会となった。12月14日、15日の桔梗屋文化祭当日には、多くの地域の方々も来場した。

【秋山】

下見をする生物部

⑤文化祭来場の地域の方々へ説明する五十子部員

右上、文化祭を終えて⑥五十子部員 ⑥顧問佐藤周先生
左上、今年も出展の写真部作品
左、昨年に続き、取材と藤原藤沢新聞「大銀杏」の展示と配付(新聞部)



藤嶺祭2025「心を揺さぶる舞台」 吹奏楽部の魅力的な演奏

「部員一人ひとりが生き生きとしていて、一体感が素晴らしい」「演奏が素晴らしい、感動した」。来場者からこのような称賛の声が届いたのは、両日とも講堂を大いに沸かせ、見事な演奏を響かせた吹奏楽部だ(写真④)。「演奏が始まると、それは男子生徒が息を合わせる一つの作品だった」。

10月27日は雨天であったが、観覧席には多くの来場者が集まり、開演を今か今かと待ち望んでいた。開演にあたり、押尾先生は「皆様、ようこそ越後県にようこそお越しくださいました。これから藤嶺吹奏楽部による演奏ステージをお届けします。オープニングを飾るのは、

「部員一人ひとりが生き生きとしていて、一体感が素晴らしい」「演奏が素晴らしい、感動した」。来場者からこのような称賛の声が届いたのは、両日とも講堂を大いに沸かせ、見事な演奏を響かせた吹奏楽部だ(写真④)。「演奏が始まると、それは男子生徒が息を合わせる一つの作品だった」。

10月27日は雨天であったが、観覧席には多くの来場者が集まり、開演を今か今かと待ち望んでいた。開演にあたり、押尾先生は「皆様、ようこそ越後県にようこそお越しくださいました。これから藤嶺吹奏楽部による演奏ステージをお届けします。オープニングを飾るのは、



1回勝負、見事な演奏

Q. 一番印象に残っている曲を教えてください。
A. 『Sing Sing Sing』です。僕のソロパートもあり、皆が手拍子してくれました。最高でした。

Q. 演奏前はどんな気持ちでしたか。
A. すごく緊張しました。演奏には慣れていますが、MCは初めてでした。

Q. 演奏に向けて、どのような練習を重ねてきましたか。
A. 7月中は野球応援の演奏があり、今回の演奏は新曲が多く、その中には難しい曲も多くあります。今年度は中学1年生が5、6人、高校1年生が初めて吹奏楽部に入りました。指導と自分たちの練習を両立させながら頑張りました。

西村部長は輝いた目で語り、そのやり遂げた表情から、達成感が記者にも強く伝わってきた。吹奏楽部の見事なパフォーマンスは、多くの人の心を揺さぶり、音楽の魅力を再認識させてくれる最高の時間となった。



④吹奏楽部のリーダー西村部長 ⑤演奏後の様子

十一月の朝礼

11月1日、1限に月初めの朝礼が行われた。校長は冒頭今日はグラウンドで実施できると思っていました。昨日の雨で地面が濡れているためできませんでした。今朝は暖かいです。早朝は冬の足音が聞こえてきました」と語り、季節の移ろいに触れた。

続けて「藤嶺祭が終わり、落ち着いてきたと思います。が、中学3年生は熊野研修旅行があります。季節の変わり目でもあるので、体調には気をつけてください」と健康管理を促した。また、「11月は前に行い、

整える月、12月は来年に向けて準備する月です」と述べ、月ごとの心構えにも言及した。

訓話の主題として、校長は「自律」について話された。「体調や環境によって自身の調子は変わります。学校生活を送る中で、調子がよいときもあれば、人間関係などがうまくいかないときもあります。そうしたときに大切なのが『脚下照顧(きやつかしようこ)』です。意味は『自分の足元を見つめなさい』ということです」と説明。「目の前に行い、

自分の心を整えることで、その姿勢は周囲にもよい影響を与えます」と語った。

さらに、慶應義塾大学の岩尾俊兵先生の言葉「価値は限られていてから思い込む」を紹介し、「学校生活の中で、感じることを、新しい考えを取り入れること、そして『奪う』のではなく『ともにつく』という考えを持つてほしい。『思い込む』ことは、他者の考えを奪うことにもなり得ます。互いの考えを尊重し、関わり合いながら協力して活動していくことが大切です。それが『自律』、そして

もう一つの『共生』です。自ら環境を整え、他者や周囲と協同すること。学校生活は、仲間とともにつくっていくものであり、それがクラスや部活動です。こうした視点も、今後の一歩として持ってください。最後に、遊行寺本堂への一礼、ト・ウ・レ・イを大切にしましょう」と締めくくった。

校長訓話の後、生活指導部より、学校生活や衣替えに関する注意が全校生徒に向けて行われた。最後に、生徒会と藤嶺祭実行委員長の小柴君から、「藤

嶺祭2025お疲れさまでした。今年も大いに盛り上がり、新しい藤嶺文化が生まれました。準備から片付けまで、本当にありがとうございました。Classで校内アンケートを行いますので、ご協力をお願いします。来年の成功も切に願っています」と、全校生徒への感謝と来年度藤嶺祭への協力が呼びかけられました。また、生徒会長の山口君から弁論大会決勝進出者7名の発表が行われ、その後、朝礼は締めくくられました。

最後に、生徒会と藤嶺祭実行委員長の小柴君から、「藤

【秋山】

【秋山】

吹奏楽部、遊行寺ペット法要で献奏



本堂、法要出席者の前で献奏

ジエームズ・スウェアリン
ジェン作曲「ロマネスク」

穏やかで優雅な旋律が、
法要の静かな祈りの場に調
和し、ペットを偲ぶ心を穏
やかに表現していました。

「ハウルの動く城」より
「人生のメリーゴーラン
ド」

宮崎駿作品の名曲で、夢
や記憶を感じさせる旋律
が、ペットとの日々の思い
出を呼び起こし、懐かしさ
や感謝の気持ちを抱かせて
いるようでした。

Green「選か」

希望や前向きな別れの
メッセージを持つ歌詞が、
悲しみの中にも「一緒に過
ごした時間への感謝」や
「未来への希望」を感じさ
せてくれました。

いきものがかり「ありがとう」

感謝の気持ちを直接的に
表現した楽曲で、ペットへ
の「ありがとう」の思いを
そのまま伝えていました。

秦基博「ひまわりの約束」

温かく、切なく、誠実な
思いを表す旋律が、永遠に
残る約束や愛情、絆を象徴
し、ペットへの想いを深く
表現していました。

来場者からは、「演奏が



指揮で思いを表現 顧問の岡野先生

お上手で、今までペットと
過ごした時間がよみがえ
り、泣きそうになりました。
ありがとうございました。いま
「今はもういないけれ
ど、ペットと一緒にいるよ
うな気持ちになりました」
といった感動の声がか
れました。

献奏後には、遊行寺の僧
侶による御経が唱えられ、
一浄上人様から御賦算が行
われました。その後、来場
者はペットの墓前で塔婆を
奉納し、亡きペットへの想
いを改めて伝えていまし
た。 【秋山】

来迎寺教養講座「医学と仏教から見える、親子の絆」



⑤御寺の入口を登ると⑥美しい本堂

インの著書 『自己と
他者』の言葉にも触れら
れました。「女性は、子
どもがいなければ母親に
なれない。彼女は、自分
に母としてのアイデン
ティティを与えるために
子どもを必要とする。男
性は、自分が夫になるた
めに妻を必要とする。夫
という存在は、妻の存在
によって与えられる」こ
のように、人は互いにその
存在を与え合って生きてお
り、その関係性を「補完
性」と呼ぶことがわかりま
した。

二人称（親子、妻と夫）
の死は、この「補完性」が失
われるという意味で特別な
座講演会が行
座講演会が行
座講演会が行
座講演会が行



月3日、鎌倉
西御門の来迎
寺にて教養講
座講演会が行
座講演会が行
座講演会が行
座講演会が行

講師は、茨城
生は、この言葉を、まさに父
親と子の関係において実感し
ていると語られました。

県古河市にある時宗一向寺の
住職である峯崎賢亮先生でし
た。演題は「父母をお浄土へ
送った元内科医の体験談」で
す。親子の関係性について峯
崎先生は、偉人たちの言葉を
挙げながら、次のように語ら
れました。

江戸時代の狂歌師・大田南
畝（おおたなんぼ）の狂歌
「今までは 人のことだと
思うたに 俺が死ぬとは こ
いつはたららん」この言葉に
ついて峯崎先生は、自身が年
老い、両親を看取る中で実感
した心情と重なるものがある
と語られました。

また、精神科医 R・D・レ
このようなことは、大切な
がある。



鎌倉市による御寺の案内板も

【中園】
1956年生まれ。東海大
学医学部卒業。時宗一向寺
（茨城県古河市）住職。元総
合内科専門医。2008年、
論文「死を覚悟した人達の為
の浄土門の教え」で第4回涙
骨賞最優秀賞を受賞。著書に
『四十歳からの南無阿弥陀仏
― 内科医から見た念仏 ―』

教育実習スタート 先輩 伊藤俊先生 田中望歩先生に尋ねる

11月4日から22日まで、教育実習が行われた。今回は、実習生である伊藤俊先生と田中望歩先生に、実習開始直後の心境をお伺いした。

伊藤俊先生

Q. 大学では何を学んでいますか？
 A. 中央大学文学部人文社会学科英語文学文化専攻で学んでいます。人とコミュニケーションをとるとき、なぜ言語は法則に従って使われているのか、日本語が第1言語である人が第2言語として英語をどのように身につけていくのか、といったことを研究しています。母国語は自然に身につきますが、第2言語はどのように習得されるのかを学んでいます。

Q. 教員を目指すうえで、思ったきっかけは？
 A. 生徒の成長を見守りたいと思ったからです。望先生と田中望歩先生に、英語は勉強するだけでなく、実際に使えるようになってほしいです。留学などで海外に行く機会を通して、将来に役立ててほしいと思っています。

Q. 高校時代、一番お世話になった先生は？
 A. 市川嘉男先生です。進路指導が的確で、生徒の本質を見抜いてくださいます。私自身も進路指導の際に、データをを用いて分析してくださり、良い意味で緊張感を与えてくださいました。

Q. 教科の中で一番教えた科目は？
 A. 論理表現です。私は中高時代、単語も文法も苦手でした。文法が嫌いな人にも、文法を「使えるもの」として身につけてほしいです。

Q. 受験期で一番つらかった時期は？
 A. 共通テストの翌日に自己採点をしたときです。もと



伊藤 俊 先生



田中 望歩 先生

もと横浜国立大学を志望していましたが、数学で大きく失敗してしまい、落胆しました。

Q. 尊敬している歴史上の人物は？
 A. サザンオールスターズの桑田佳祐さんです。一番好きな歌手です。

Q. 先生になった際に、生徒に伝えたいことは？
 A. 海外に行ってほしいです。中学・高校時代に行けたらもちろん良いですが、大学生になってからもいいので挑戦してほしいです。外国語教育では文法も大切ですが、実践的な環境で外国語に触れることは、外国語を上手に使いこなせるようになるために非常に効果的だと思います。

Q. 教員を目指すうえで、思ったきっかけは？
 A. 塾でアルバイトをして、生徒が理解してくれただけでなく、瞬間にうれしさとやりがいを感じたからです。

Q. 高校時代、一番お世話になった先生は？
 A. 二人います。市川嘉男先生と阪上先生です。進路指導や学習面でお世話になりました。

Q. 教科の中で一番教えた科目は？
 A. 中学理科です。塾でも中学理科を教えています。特に化学と生物が好きです。

Q. 受験期で一番つらかったことは？
 A. 指定校推薦での大学受験を希望していましたが、なかなか成績が上がらなかったことです。その際に先生に相談しました。一人で抱え込まず、積極的に先生に相談してほしいです。

Q. 尊敬している歴史上の人物は？
 A. サッカー選手のフィリッポ・インツァーリ選手です。練習にストイックに取り組み、活躍しているからです。

Q. 先生になったら、生徒に伝えたいことは？
 A. 「理由は後からついてくる」という言葉です。学生時代に先生から言われてきた言葉でもありません。

Q. 何事も理由にこだわって立ち止まるのはなく、まずは行動し、うまくいったら理由は後付けでもよい、というメッセージだ。伊藤先生の理由は「あれ、一度海外に行つてほしい」という考えとも共通する部分があると感じた。

実習を終えての感想

伊藤俊先生 「楽しかったです。授業も楽しく、入試説明会の運営にも関わることができて、とても勉強になりました。自宅学習日でも先生方は全員出勤して、生徒の立場とは違うことを実感しました。環境は変わらなくても、立場が変わって生徒の前に立つのは、楽しい反面、とても難しかったです。」

田中望歩先生 「まず、率直に楽しかったです。教員の立場になって、生徒のときには分からなかったことがたくさん見えました。授業準備の大変さを改めて実感しましたし、教えて生徒が理解してくれるとうれしかったです。授業は先生ごとに工夫やこだわりがあるので、ぜひ真剣に受けてほしいです。受験に詳しい先生も多いので、いろいろな先生に相談してほしいです。」

【秋山代島】

藤嶺探究ゼミ「相手に伝わる話し方を学ぶ」DJ・HAGGYによる話し方講座

毎年、高校2年生では11月頃から、毎週水曜日の6限に探究学習が行われている。「藤嶺探究ゼミナール」と題し、全8講座の中から、生徒が事前アンケートをもとに興味のある講座を選択して受講する。記者は、ラジオDJ・パーソナリティーとして活躍するDJ・HAGGY（ハギー）こと萩原浩一氏が講師を務める「相手を惹きつける話し方講座」を受講した。

置きし「最近では、電話に出ることが怖くて仕事を辞めてしまう20代もいるので」と語った。教室からは驚きの声が上がった。

さらに「私は大学でも『話し方』の授業を担当していますが、最初は本当に『もしもし』から教えます。幼稚に思えるかもしれませんが、今はそれほど『基本』が必要な時代なので」と続けた。

また「親に『何を言っているかわからないから、もう1回言ってくれませんか？』と聞かれた経験はありますか」と問いかけて、その理由として「自分の声は『空気』と『骨』を通して自分に届きますが、相手には『空気』だけで届きます。そのため、同じようには聞こえていないのです」と説明し「だからこそ『相手に伝わる話し方』が重要になります」と強調した。アクセントの影響と印象

萩原氏は「よい間違いと正しい答えの両方を言ってくれました。2月は間違いで、4月は正解です」と説明した。生徒たちは「何が違うの？」と戸惑った様子を見せていた。

萩原氏は「多くの人は2月や4月を『に』『し』にアクセントを置いてしまいがちですが、正しくは『が』を強調します」と解説した。さらに「私の後輩でも、面接で『2月』の『に』を強調して言ってしまう」と話した。



講義後、喜んで撮影に応じて下さったDJ・ハギー氏

「話し方」の必要性
講義の冒頭、萩原氏は「これから皆さんは、大学進学や就職などで面接や発表の場が増え、『話し方』が求められるようになります」と前置きした。萩原氏は「話し方」の重要性を強調し、相手に伝わる話し方について説明した。



「伝わる話し方」を伝授

鼻濁音が与える印象
続いて「鼻濁音」についての説明があった。萩原氏は「『小・中学校』『大学』は『ん』と鼻濁音で発音しますが、『高等学校』は二語が合わさった複合名詞のため、『が』を強く発音します。『んが』を『が』と発音すると、怒っているように聞こえることがあります。鼻濁音を誤ると、相手に強い印象を与え、人間関係に影響することもあるのです」と説明があった。

萩原氏自身の経験
実践的アドバイス
講義の終盤では、自身の経験についても紹介した。萩原氏は「団体名、名前、内容、団体名、名前」の順で話すと、名前が2回出てくるため、相手に覚えにくいという経験を紹介した。テレビやラジオ番組の「番組冒頭で『ご覧のパーソナラーの提供でお送りします』と言います。最後にも同じ文言を伝えるのは同じ仕組みです」と説明した。

「1秒も無駄にしない」
DJ・ハギーさんの「人を惹きつける話し方講座」第2回は、11月12日6限に行われた。講義冒頭、萩原氏が黒板に鼻濁音で「が・ぎ・ぐ・げ・ご」と書くと、生徒たちは読み方に戸惑いを見せた。萩原氏は「鼻濁音です」と説明し、前回の学びを振り返らせた。この日のテーマは「自己紹介」。萩原氏は「団体名、名前、内容、団体名、名前」の順で話すと、名前が2回出てくるため、相手に覚えにくいという経験を紹介した。テレビやラジオ番組の「番組冒頭で『ご覧のパーソナラーの提供でお送りします』と言います。最後にも同じ文言を伝えるのは同じ仕組みです」と説明した。

最後に萩原氏は「来週は、皆さんに実際に声を出して自己紹介をしてもらいます。しっかりと準備してください」と締めくくりました。本講義は、実例とユーモアを交えながら、話し方の大切さを実感できる学びの時間となった。

生徒の自己紹介が終わると、萩原氏は「鼻濁音は意識できていますが、皆さん少し自信がなさそうですね」と堂々としてほしい。ただ、聞き取りやすさよりも良い」と講評した。最後に「自己紹介は自分をアピールできる大きなチャンスです。1秒も無駄にしないでください。テレビCMは1秒流すだけで6万円以上かかります。それほど『1秒』には価値があるので」と強調し、講義を締めくくった。【秋山】

「日本語の正しい使い方を学ぶ」DJ・ハギーさんの話し方講座 最終回

11月19日、萩原浩一氏（DJ・ハギー）による「人を惹きつける話し方講座」が最終回を迎えた。この日は、言葉の正確さが面接に与える影響についての話から始まり、生徒たちは真剣な表情で耳を傾けていた。

萩原氏は、大学名の読み

続いて予定されていた90

秒自己紹介が行われたが、多くの生徒は60から70秒で

終えてしまっている、時間感覚の難しさを実感していた。

その中で、I. Y. 君とI. E. 君の2人は地元の魅力について語り、見事に90秒ぴったりで終了。教室内からは驚きの声が上がったという。特に、海老名の魅力を紹介する際に使われた「畑」や「コンクリート」という表現が萩原氏の心をつかみ、「この言葉の表現、遣わせてもらいた。

講義後半では、日本語の誤用についての指摘が行われた。「『たくさん』という言葉は、本来、人の数を表す際には使いません。正しくは『多く』や『多人数』です」と説明し、「この教室には多くの生徒がいるが正しい表現であると示した。

また、誤用が広がっている「敷居が高い」についても「本来は『相手に不義理をしていて会いにくい』という意味です。店や場所に対して使うのは誤りです」と解説し、生徒は驚きながらも熱心にメモを取っていた。

最後に萩原氏は「面接やプレゼンテーションの場で、今回学んだことをぜひ思い出してください。この講座を受けた皆さんは、他の人より確かな知識を身につけています。日本語は間違えやすいからこそ、丁寧に扱ってほしい」とエールを送り、全4回の講義を締めくくった。

実際にアナウンサーとして活躍する専門家から直接学べた本講座は、生徒たちにとって、日本語の正しい知識と「伝わる話し方」を身につける貴重な機会となった。

【秋山】



最終回、正しい日本語で話す



皆さんこんにちは！今年度、新聞部に入部しました1年D組の代島蒼一朗（だいじまそういちろう）です。今年度の途中から入部となりましたが、他の部員に追いつくよう一生懸命活動しております！

湘南台中学校出身で、中学時代は科学部の部長をしておりまし



皆さんはじめまして、今年度、新聞部に入部しました1年E組の大庭新（おおばあらた）です。

中学の部活はバスケットボール部で、副キャプテンを務めていました。状況に応じて動くことが多く、周りを見てプレーすることを意識してきました。練習では声を出して



皆さんこんにちは。今年度新聞部に入部しました1年E組の中園智品（なかのちひな）かぞのともあきです。

4月に入部して硬式野球部の取材や校長先生の来迎寺教養講座の取材、黒岩知事との対話の広場を取材させて頂き、またニュージランドの研修記（6枚）などを書きました。6枚にまとめ、記事を書き終えたことは凄く達成感がありました。入部の理由は、興味がある

た。今年の1月23日から4月5日までチーム語学研修でニュージランドに滞在していますので、新入生や新入部員さんに会えるのが楽しみにしております！2026年度もよろしくお願いたします！